

(別添)

世界の人びとのための J I C A 基金活用事業・業務完了報告書

1. 業務の概要：	
(1) 事業名	インドネシア：西ジャワ州スメダン県とバンドウン県における小規模農家の持続可能なコーヒー栽培のための研修事業
(2) 実施団体名	耕志の会
(3) 実施期間	2018年7月3日～2019年1月31日
(4) 実施国	インドネシア共和国
(5) 活動地域	西ジャワ州スメダン県 バンドウン県
(6) 活動概要	<p>①活動の背景：</p> <p>耕志の会代表の経営する農園たやでは、2001年よりインドネシア・タンジュンサリ農業高校と福井農林高校の友好交流のお手伝いをしてきた。その結果、長期的な農業人材育成への需要が高まり、2008年よりタンジュンサリ農業高校の卒業生を対象に外国人技能実習生として農業研修を開始した。さらに2011年より実習生や日本人有志と一緒に「耕志の会」を組織し、実習生のニーズに合った研修の実現や、実習生の帰国後の農業分野でのアクションプラン作成を支援している。2016年より実習修了生を中心に「耕志の会」のインドネシア支部を立ち上げ、月2回の地域おこし勉強会を開催。2016年にJICA基金の採択事業となり、小規模農家の研修会を行う。その研修会を経て、小規模農家たちは持続的に安定した収入を得て、かつ環境に配慮した営農をするために、グループによるコーヒー栽培を目指している。現在、実習修了生が中心となり近隣の農家を集めてグループを作り、コーヒー栽培の圃場や苗木などの資金は独自に準備している。</p> <p>②活動の目標：</p> <p>耕志の会に属している現地農家が先進的な環境配慮型のコーヒー栽培地を見学し、セミナー等を通じてグループメンバーや近隣の小規模農家へ持続可能なコーヒー栽培の支援を行う。市場で周縁化している小規模農家が協同して出荷できるように整え、有利な販売につなげていけるようにしたい。また次世代の農業や地域を担う農業高校生や大学生にも研修会の参加を呼びかけていきたい。</p>

2. 業務実施結果：
(1) 実施した内容
<p>【先進地視察南スマトラ州ランブン県の実施】</p> <p>実施日：2018年8月4日～8月8日</p> <p>コーヒー栽培のグループリーダーたち8名と耕志の会コーディネーター1名が先進地である南スマトラ州ランブン県へ先進地視察に出かけた。</p>

主な訪問地は 3 か所で、地元の大規模コーヒー農家、コーヒーの仲買人、そしてネスレのコーヒー研修施設である。計画当初は大規模コーヒー農家とコーヒーの仲買人のみの見学予定だったが、現地で見学中に農家からブン県へ先進地視察に出かけた。

主な訪問地は 3 か所で、地元の大規模コーヒー農家、コーヒーの仲買人、そしてネスレのコーヒー研修施設である。計画当初は大規模コーヒー農家とコーヒーの仲買人のみの見学予定だったが、現地で見学中に農家から苗木の勉強をした方が良いというアドバイスを受け、急きょネスレのコーヒー研修施設での研修も盛り込まれた。

農家訪問では、栽培技術だけでなく現状の政策や政府からの助成、また価格変動などについて意見交換が行われた。地元農家の話によると、政府から援助として配られる種苗は、一見品質は良いものの、その土地の気候に合わない品種だったりもするため事前に地方政府との確認が必要とのことだった。また雨の多い年は花芽が落下し易く、収量が激減する年もあるとのことだった。仲買人訪問では、買い取り価格の高い質の高いコーヒーについてレクチャーを受けた。特に赤い実のままでは値段が安いので、果肉と果皮を剥く機械を導入し、グリーンビーンズと言われる段階で販売した方が有利だと教わる。ゴミの除去や割れ豆の選別が買い取り価格にも大きくかわることを教わる。ネスレのコーヒー研修施設では、コーヒーの苗木づくりを実践的に学び、デモファームで剪定や管理法を学んだ。苗木生産・供給が円滑にいくことが、産地づくりの大きな力であることを学ぶことができた。これらを通じて、政府の栽培講習会では聞けなかった現場の経験を知ることができ、参加者一同栽培への意欲を高めることができた。

日程

8/5(日)	コーヒー農家訪問(Talang Padang)
8/6(月)	コーヒー仲買人訪問 (Pringsewu)
8/7(火)	ネスレ育苗・研修施設視察(Talang padang)

参加者

職業	地区	人数
農家	チセダ地区 スメダン県	3名
農家	ランチャカロン地区 スメダン県	3名
農家	パンガレガン地区 バンドゥン県	2名
農家	現地スタッフ	1名

【2. スメダン県タンジュンサリ農業高校でのコーヒーセミナーの開催】

実施日：2018年8月20日

先進地視察に参加した農家が講師となり、スメダン県タンジュンサリ農業高校でコーヒーセミナーを開催した。生徒約200人と2名の教員が参加した。先進地であるランブン県でのコーヒーの栽培技術や知識を生徒や教員と共有することを目的として開催した。また、同高校は、スメダン県やバンドウン県における農業教育の中心校で、講師となった農家も同校の卒業生である。本セミナーは高校からの依頼を受け、耕志の会が協力する形で開催。費用等はすべて高校の予算で行われた。

【3. 先進地視察スメダン県の実施】

実施日：2019年9月4日

農家グループの近隣ですでにコーヒー栽培で成功している「Paniis グループ」を見学。このグループでは8年前からコーヒー栽培に取り組んでおり、農業省からも高く評価されている。このグループでは品質の高い独自のコーヒー品種を持っており、その品種の苗の販売も行っている。この品種はスメダン県の気候にも良く合っており、同県の耕志の会所属のメンバーがいるチセダ地区やランチャカロン地区でも有意義と考えられる。見学を終えて、同品種導入の検討をしつつ、見学先のリーダーからは新しい品種の選別の仕方を学び、自分たちで品質の高い新しい品種選別と登録まで行いたいと意見交換ができた。

参加者

職業	地区	人数
農家	チセダ地区 スメダン県	3名
農家	ランチャカロン地区 スメダン県	3名
農家	パンガレガン地区 バンドウン県	3名
農家	現地スタッフ	1名

【4. 村落コーヒー栽培セミナーの実施】

実施日（実施場所）：9月7日 18：00～21：00（ランチャカロン地区）

10月19日 13：30～16：00（チセダ地区）

10月20日 12：00～15：00（パンガレガン地区）

耕志の会所属の農家が組織する3地区の農家グループで、先進地視察等で学んだ知識をグループメンバーや周辺農家へ伝えるためのセミナーを開催した。参加した農家は3地区合わせて77名となった。セミナーでは、先進地視察した農家の経験を共有すると共に、県行政のコーヒー担当官や成功している先進農家を講師として呼び、実際の行政のコーヒー栽培支援プログラム等を学ぶことができた。行政のプログラムでは、環境保護を行いつつ、コーヒーを栽培するアグロフォレストリー支援のプログラムの紹介があり、グループでもその支援プログラムを活用してコーヒー栽培を行うことになった。またコーヒー品質の界大会で2014年に1位を獲得した事のある先進農家からは、収穫後の管理についてのアドバイスを受けた。生の豆だけを販売するのではなく、加工する機械を手に入れ、ローストまで行う事の重要性についても意見交換できた。セミナーを経て、農家グループでは、森林保護政策に違反しない栽培方法を順守する意識が高まり、収穫後の有利販売に向けて加工用機械への期待も高まった。またセミナーを通じて、行政の担当官と実際に関係を作ることができ、担当官のグループ認知度が高まった。今後の行政からの巡回指導等の実施の確約を得ると共に、問題を相談する窓口を得

ることができた。

セミナー参加者 ランチャカロン地区

地区	年齢	人数
ランチャカロン地区	30代	2名
ランチャカロン地区	40代	9名
ランチャカロン地区	50代	9名
ランチャカロン地区	60代	4名
ランチャカロン地区	70代	3名

セミナー参加者 チセダ地区

地区	年齢	人数
チセダ地区	20代	2名
チセダ地区	30代	3名
チセダ地区	40代	7名
チセダ地区	50代	9名
チセダ地区	60代	5名
チセダ地区	70代	4名

セミナー参加者 パンガレガン地区

地区	年齢	人数
パンガレガン地区	20代	4名
パンガレガン地区	30代	4名
パンガレガン地区	40代	7名
パンガレガン地区	50代	3名
パンガレガン地区	60代	2名

【5. 定期勉強会の開催】

実施日：2018年9月1日、9月7日、9月22日、10月21日、10月30日、11月17日 計6回

勉強会は、当初3つのグループリーダーたちがタンジュンサリ農業高校に集まり、開催する予定だった。しかし最も遠いグループはタンジュンサリ農業高校まで90km離れていること、また9月以降農繁期の雨季に入り全員を集めて勉強会を開くことが難しくなった。

そこでインターネットを利用して3つのグループを繋いで行った。ただしチセダ地区はネット環境が悪いため、チセダ地区グループのリーダーたちはタンジュンサリ農業高校内にある耕志の会事務所まで来て、ネット会議に参加してもらった。

第1回目勉強会（9月1日）

9月4日実施予定の先進地視察スメダン県の日程と行程を確認。現在直面しているコーヒー栽培の問題点を話し合う。3つのグループの共通の問題点は、苗の入手方法と、それぞれの地区に適したコーヒーの品種が分からないことであった。訪問予定の先進地は、チセダ地区やランチャカロン地区と同じスメダン県にあり、そこでの栽培方法や品種などについて質問していこうと話し合われた。

第2回目勉強会（9月7日）

コーヒー栽培について話し合う。品質向上を促す枝の剪定方法を確認。病害虫についても新しい情報を仕入れてきたメンバーが発表した。また会議同日に行われる予定のランチャカロン地区のセミナーについても話し合われた。先進地視察で得た情報を整理すると共に、近隣農家にも理解されやすい発表の仕方など、意見を交換した。

第3回目勉強会（9月22日）

ランチャカロン地区のリーダー・クスワント氏から、すでに終了したセミナーの報告があり、そこで学んだコーヒーの収穫後の加工方法について勉強した。乾燥方法を誤ることで、品質低下を招いたり、脱穀機の性能によって品質が左右されることを学んだ。また品質向上に欠かせないコーヒー豆の発酵については、専門書を用意して情報交換を行った。

第4回目勉強会（10月21日）

ランチャカロン地区とチセダ地区のセミナーの報告があった。すでにチセダ地区では栽培が始まっていることもあり、実際のコーヒー苗木の管理の土寄せや除草について確認した。

第5回目勉強会（10月30日）

4回目では時間がなく、話し合えてなかった3か所のセミナーでの栽培や収穫後のポイントについて、改めて確認した。栽培時の観察のポイント、病害虫の防除方法、また行政支援のプログラムについて確認した。特にアグリフォレストリー支援プログラムへのニーズは高く、この時には3か所のグループすべてでその申請を行政に行ったこと確認できた。

第6回目勉強会（11月17日）

各自取得した領収書と活動報告書の中身を確認し、最終報告書のとりまとめを行った。

第1回目～第6回目の会議参加者（チセダ地区以外は、インターネットでの参加）

地区	人数
チセダ地区	3名
ランチャカロン地区	3名
パンガレガン地区	3名
現地スタッフ	1名

（2）実施成果：

今回の活動を通じて、3地区の農家に持続可能なコーヒー栽培の認知が高まったと言える。これまでも行政によるアグリフォレストリー支援プログラムは、同地区でも行われてきたが、行政職員の巡回が不十分だったり、集落のリーダーの理解不足で、必ずしも持続可能な農業が実現していたとは言えない状況だった。特にコーヒー栽培においては、農家の認識不足から、森林の木々を材木用に無許可で切り倒してしまった事案も発生しており、行政側との関係も必ずしも良好ではなかった。今回の活動を通じて、必ずしも森林の木々がコーヒーの栽培の邪魔になるものではなく、むしろ品種によっては弱日光の方が、より高品質になることを確認できたため、農家の森林保護への意識も変わったように思える。

近隣地区では、国有地をアグリフォレストリーとして利用できる支援プログラムを不正利用し、木材の切り出しやアグリフォレストリーを行わずに野菜栽培に集中してしまったために、肥沃な表土が流出し、その後の栽培が芳しくない地区もあるという。今回の活動でも国有地の耕作権を得て、アグリフォレストリーによるコーヒー栽培を行うのだが、農家の意識が変わったことで、環境保護と収入向上の両面から、持続的な生産が可能になったと考えられる。

栽培では、剪定や除草、病虫害防除などの日々の管理に加え、樹勢や花・実などを観察して新しい品種を選別する方法も学ぶことができた。自分たちの品種まで持ちたいと農家も強い意欲を示しており、これまでやや粗放に栽培されてきた伝統的なやり方から、より管理の行き届いた栽培法に変わっていくことが期待できる。

また販売においても、生のままのコーヒー豆（通称：チェリー）を販売するのではなく、発酵と脱穀、乾燥といった加工工程を経て、付加価値を如何に高められるかを考えるようになっている。加工機械はやや高額であるため、自己資金では難しいが、今回の行政との繋がりで購入に関しても支援があるとの情報を得たので、行政と一緒に進めていきたいと考える。

行政の担当官はこれまで同地区の巡回はほとんど行われてこなかった。一つには積極的な農家が居ないという行政側の認識であったが、今回の活動を通じて、これからは定期的に巡回していきたいと確約も得ることができた。同地区での行政からの支援が一層進むことを期待したい。

（3）得られた教訓など：

3つのグループリーダーの成長が著しかった。先進地視察やセミナーの企画のほとんどをリーダーたちで立案・実行してもらったのだが、その過程で責任感が強まり、リーダーとしての姿勢が見られるようになった。領収書等の取得や取扱いについて、現地の方との感覚の違いに苦労した。

(4) 今後の活動・フォローアップの方針：

今後は、それぞれのグループリーダーが中心となって栽培をすすめていく。行政の担当官の巡回も期待できるので、地元行政と一緒に取り組んでいきたい。特に病害虫の防除方法の指導や収穫後の加工に必要な機材購入の補助等を当団体からも行政に働きかけていきたい。

3. その他(エピソード・感想・写真など)

(1) 活動中のエピソード・感想など

農家だけで先進地視察やセミナー等を立案し実行したため、現地の行政とのやり取りにやや手間がかかった。農家だけで視察やセミナーを行うことはかなり珍しいケースだと現地の行政からも最終的には評価を受けた。

(2) 活動の写真



南スマトラ州ランプン県のコーヒー農家訪問



ネスレ育苗・研修施設訪問



スメダン県先進農家視察



スメダン県タンジュンサリ農業高校でのコーヒーセミナーの開催



チセダ地区の村落コーヒー栽培セミナー



テレビ電話を利用して定期勉強会の開催

(3) JICA 基金活用事業を受託したことで団体の成長につながった点・良かった点

JICA 基金活用事業を受託したことにより、当団体の現地スタッフの会計処理能力や組織力強化につながった。